

# タラ形・レバ形で言いさす文

白川博之

“Unfinished” Sentences with *- tara* and *- reba*

SHIRAKAWA, Hiroyuki

キーワード：タラ形、レバ形、言いさし、願望、勧め、裏の意味

## 1. はじめに

日本語の談話（特に話し言葉）では、従属節による言いさしの表現（主節を言わずに従属節だけで終わる表現）が多く見られる。タラ形・レバ形で言いさして願望や勧めを表わす文もそのような表現の一種である。

たとえば、次のような言いさしの文がそれに当たる。

- (1) 僕はね、二号店は大きなデパートの中に出て、三号店はハワイに出せたらって思ってる。(ひらり③)
- (2) シャワー使ったら? (ひらり①)
- (3) せめて非常勤講師の口でもあれば……。 (めぞん⑮)
- (4) ひらり、竜太先生とつきあえば。(ひらり③)

これらの例文において、(1)(3)は願望を、(2)(4)は勧めを表わしている。

このような文は、文法的に見て非常に面白い特徴を備えている。第一に、統語的には不完全な形式をしていながら、発話レベルでは、何の不完全感もなく意味が解釈できること、第二に、一般的には条件を表わすとされるタラ形・レバ形が、言いさしの形で使われると願望・勧めといった、条件とは一見関係のないような意味に解釈される、という点である。

条件を表わす接続形式にこのような用法があることは、いろいろな先行研究がすでに記述しているところだが<sup>1)</sup>、用法の登録以上の突っ込んだ文法的な考察を加えているものはほとんどなく、大きく分ければ、①本来あるべき主節—たとえば、「～トラドウカ」の「ドウカ」、「～レバイイ」の「イイ」などが省略されたものとして片付けるか、②接続用法とは別個の終助詞的な用法として登録するか、のいずれ

かであった<sup>2)</sup>。

いずれの立場も、満足の行く文法的説明とは言えない。①の立場は、「不完全文」であるところの言いさし文を「完全文」に還元して説明しようとするものであり、「不完全文」の意味的な完全性には目を向けていない。一方、②の立場は、意味的な完全性を重視している反面、接続用法との連続性の説明を放棄している。

わたくしは、言いさしという表現形式に「完全文」とは独立した表現価値を認めながらも、その表現価値は、その形式の本来的に持っている意味そのものではないと考える。つまり、本来の意味と文脈情報とを手がかりにして算出される派生的な意味だと考える。

そこで、この研究では、タラ形・レバ形の言いさし用法について、用例を詳しく観察することによって、どのような条件の下に、どのような意味で使われるのかを明らかにしたい。その過程で、①条件を表わすとされる接続形式がなぜ願望・危惧・助言の表現に使われるのか、②形式的には不完全なもの、なぜ意味的には不完全でないのか、という疑問にながしかの解答が与えられればと思う。

## 2. タラ形による言いさしの用法

まず、タラ形による言いさしの文から観察することにする。

聞き手の存在を前提とした発話（聞き手存在発話）であるか、かならずしも前提としない発話（聞き手不在発話）であるかで、全く異なった用法になるので、それぞれの場合に分けて考えてゆく<sup>3)</sup>。

### 2.1. 聞き手不在発話の場合

独り言や心内発話など、聞き手不在発話の場合に

は、タラ形の言いさしは、願望もしくは危惧を表わす。次に示す例のうち、前3例は願望の、後2例は危惧の用例である<sup>4)</sup>。

(5)僕はね、二号店は大きなデパートの中に出して、三号店はハワイに出せたらって思ってる。(=1)

(6)古屋：久美子さん、なにか？  
武志：いえ。なにか、こちらでなかったかと、そんなことをちょっと伺えたらと思ひまして。(想い出)

(7)響子の母：私達、これからなにを楽しみに生きて行けばいいのかしら…。孫でもいてくれたら……。ま、今さらグチ言っても仕方ないけど…。

響子の姑：いや～そんな…。響子さんだって、そろそろ……。

響子の母：あらっ、再婚だなんてっ。いえね、そりゃー私達孫はほしいですけど…(めぞん⑤)

(8)こいつに部屋で長居でもされたら……。 (東京①)

(9)こ…こんなひねたガキに、管理人さんを好きだなんて知られたら…。 (めぞん⑧)

用例の数から言うと、願望よりも危惧の用法の方が多い(14例中10例)が、願望の用法も珍しくはないようである<sup>5)</sup>。

注目すべきは、いずれの用法の場合も、欠けているタラ節の帰結が問題になっているのではない、ということである。もっと言えば、話し手は、タラ節の内容を想定している(それは、タラ形の本来的な機能による)だけであり、結果的に、タラ節の内容の実現それ自体に対しての話者の評価的感情—良い(嬉しい)か悪い(困る)か—を表出している。

ただし、評価的感情の表出というのは、あくまでも、語用論的に出てくる表現価値であり、タラ形による言いさしという形式自体が持っている機能ではない。その証拠に、次のような言いさし文は、その文だけでは評価的感情の表出という意味は保証されない。

(10)もしも明日、まわしをつけなかったら……という思いが[ひらりの心に]よぎりました。でも、それなら心意気という点だけでも、久男は力士に向かないのだとひらりは思っていました。(ひらり①)

この言いさしは、「危惧」の感情をこめて発せられて

いるのだが、それは、タラ節の内容(「まわしをつけない」ということ)が望ましくないこととして捉えられているということが文脈によってすでに理解可能だからである。そのような文脈が全くなければ、形式・意味の両面にわたって不完全な文ということになる。

前後の文脈以外にも、評価的感情の表出という表現価値を保証する語句が文中に存在するのがふつうである。上の例で言えば、(5)(6)における可能動詞、(7)の「～テクレル」、(8)(9)の「～ラレル」、(8)の「～デモ」、(9)の「～ナンテ」などがそれで、これらが評価的感情の表出という解釈の手がかりになっている。また、次のように、「ナア」という詠嘆の終助詞をつけることによって、願望の意味を明示的に表わす場合もある。

(11)雨が降ったらなあ。(作例)

## 2.2. 聞き手存在発話の場合

タラ形が言いさしの形で聞き手にもちかけられた場合、勧めを表わす。

(12)シャワー使ったら? (=(2))

(13)一ノ瀬：五代くん、今日病院に検査しに行くんだってさ。

響子：あら、そうですか。

一ノ瀬：付いてってやったら?

響子：そんな……子供じゃあるまいし。

(めぞん⑦)

この用法については、森田(1989)に要を得た説明がある。

動詞を前件として、「～たら」で文を止めるか、「……たらいい/たらどう/……たらいいが」の形を取ると、相手にある行為の開始または終始を促す表現となる。仮定的な条件を提示することによって、結果的にその実現を促す勧誘表現となるのである。

(p.687、傍線は引用者)

ただし、聞き手に仮定的な条件を提示しさえすれば勧めの表現になるかと言えば、そうではない。

(14)みのり：ねえ、どうやったらいいんだろうね。

ひらり：サア……好きな人には好きっていうしかないんじゃない?

みのり：それが言えりゃあねえ……。

ひらり：私なら言っちゃう。

みのり：言える?

ひらり：言えるよ。  
 みり：よく平気ね。  
 ひらり：だって好きなんでもん。  
 みり：相手がイヤだって言ったら？  
 ひらり：泣く。 (ひらり①)

(15) みゆき：入試に落ちたら？  
 宏：就職するよ。(作例)

タラ形の言いさしが勧めの表現になりうるためには、①タラ節の主語が聞き手であり、かつ、②タラ節の述語が意志的動作であることが必要である。

しかし、聞き手に仮定的な条件を提示する(あるいは、もちかける)という点では、勧めの表現は、上のような表現と同じである。

相違点は、タラ節の帰結の解釈である。(14)(15)のような単なるもちかけの場合は、欠けている帰結部分は、聞き手の側で充当する(実際に発話するしないは別として)ことが期待されている。話し手は、途中まで言ってやめているわけで、その意味で、文字どおりの言いさし文と言ってもよい。

それに対して、勧めの意味になるもちかけの場合は、願望・危惧の用法と同様、タラ節の帰結は問題にならない。タラ節の内容の実現の成否が問題にされるのである。たとえば、(12)において、シャワーを使うということの実現の帰結として、どうなるか、あるいは、どうするかということの問題にしているのではなく、シャワーを使うこと自体の当否を問題にしているのである。

その点で、この用法は、願望の用法(=表出)の言いさしが聞き手に向けてもちかけられて、働きかけに移行した場合だと考えればよい。

### 3. レバ形による言いさしの用法

次に、レバ形の用法について観察する。ここでも、タラ形の場合と同様、聞き手不在発話と聞き手存在発話という二つの場合に分けて考える。

#### 3.1. 聞き手不在発話の場合

心内発話や独り言で使われた場合、タラ形の言いさしと同様に、願望を表わす。

(16) 弟でもいればな。 (めぞん⑩)  
 (17) できたらもうしばらく一刻館の管理人を続けさせていただければと思って…。 (めぞん⑬)  
 (18) 年をとった時、必ず後悔する。あの時早く

治しておけば……ってサ。(ひらり①)  
 タラ形と異なるのは、危惧の意味で使った用例が全く見当たらないことである。タラ形では言い得た次のような文で、代わりにレバ形を使うと、おかしくなってしまふ。

(8') こいつに部屋で長居でも {されたら/\*されれば}。

(9') こんなひねたガキに、管理人さんを好きだなんて {知られたら/\*知られば} …。

レバ形の言いさしのこのような性質は、タラ形とは違う意味解釈のメカニズムにその原因が求められる。

鶴田(1984)によれば、「 $S_1$ タラ $S_2$ 」を使った場合と「 $S_1$ レバ $S_2$ 」を使った場合とでは、話し手の心的態度が次のように違うという。

原則1： $S_1$ タラ $S_2$ では、話し手は $S_1$ が実現するかどうかは度外視して、実現した場合を想定して $S_2$ を主張しており、 $S_2$ の主張は聞き手にとって予想不可能なことだと考えている

原則2： $S_1$ レバ $S_2$ では、話し手は、(α) $S_2$ が実現するかどうかを決めるのは $S_1$ が実現するかどうかである。

あるいは、

(β) $S_1$ が実現した場合には、 $S_2$ は必然的に実現する。

と考えている。(鶴田(1984) P.29)

原則1の後半部分に問題が残るが、わたくしは、この記述は基本的には、妥当なものだと思う<sup>6)</sup>。

特に、レバ形の使い方についての記述(原則2)に着目したい。(β)は、「春になればさくらが咲く」のような、法則的な条件付けの文の場合であるからここでは除外して、(α)に限って考えると、「 $S_1$ レバ $S_2$ 」という文を発話する際は、「 $S_2$ を実現させるためにはどうすればよいか」という問題設定が話し手によってなされているということになる。「 $S_1$ レバ」は、その問題設定の解答として主張されるというわけである。

レバ形の言いさしが必ず願望の解釈を受けるのは、レバ形が本来的に持っているこのような性質による。 $S_1$ は、 $S_2$ を実現させるために必要と話し手が考える事象だからである。健全な精神の持ち主であれば、自分にとって望ましくないことを実現させるために何が必要かと考えることはない。 $S_2$ は、必ず話し手にとって望ましいことになる。

S<sub>2</sub>は、文脈情報を手がかりに具体的な命題の形で復元できる場合もあれば、何か「望ましいコト」の存在が抽象的に暗示されるのみの場合もある。

次の(19)は、前者の例である。

(19)弟でもいればなー。 (=15)

(19)の発話される文脈を説明すると、話し手(女子高校生)がある大学生(男性)と付き合うために、そのきっかけとして、その大学生がアルバイトでしている家庭教師の生徒になろうとする。ところが、その大学生は、自分が請け負うのは小学校高学年から中学生までだと言って拒絶する。そのあと、話し手が独り言で発話したのが、(19)である。(19)に欠けている主節を補うとすれば、

(19')弟でもいれば、先生に近付ける(のに)。とでもなるう。

一方、次の(20)のように、抽象的なS<sub>2</sub>が暗示されている場合も多い。

(20)実に素晴らしい人材だ。うちにもこういう人間味のある男がおれば…。(めぞん<sup>⑩</sup>)

この場合もS<sub>2</sub>をしいて補おうと思えば、できなくはない。

(20')人間味のある男がおればいい(のに)。

しかし、S<sub>2</sub>として想定できるのは、「いい」(「よかった」)、「うれしい」、「幸いだ」など、プラスの評価的感情を表すいくつかの述語に限られる。S<sub>2</sub>は情報内容的には空疎になり、「S<sub>1</sub>の実現自体を望む」という話し手の心的態度をより明示的に表現するために形式的に付け加えられるにすぎない。

この形式化がさらにすすむと、S<sub>2</sub>として具体的な言語表現を補いにくいような場合も出てくる。

(21)できたらもうしばらく一刻館の管理人を続けさせていただければと思って…。

(=17)

(21')続けさせていただければ{\*いい/\*うれしい/\*ありがたい/\*幸いだ}と思って

もちろん、このような場合でも、聞き手は、レバ形の表わす心的態度を手がかりに、話し手がS<sub>1</sub>を自分にとって望ましいコトとして提示しているのだということが過不足なく理解できる。

### 3.2. 聞き手存在発話の場合

レバ形の言いさしが聞き手にもちかけられた場合、タラ形と同様、勧めを表わす。

(22)おじちゃん、久男が偉くなったらここんちのお酒、寒風山って名前に変えれば。

(ひらり<sup>②</sup>)

(23)ひらり：ねえ、二人って何か似合う。デートすればア。 (ひらり<sup>②</sup>)

(24)ひらり：ねえ、戻ってくれば。

明子：親方が心配してるってわかっただけでいい気分。つれ戻しにくるまで戻らないわ。 (ひらり<sup>②</sup>)

(25)ゆき子：久男、まだ寝てんのかしら。

ひらり：ほっとけば、あんなヤツ。

(ひらり<sup>①</sup>)

勧めの意味で使われたレバ形は、ほとんど意味を変えることなくタラ形と言い換えることが可能な場合も多い(たとえば、上の(22)(23)などはそうである)が、タラ形を表わすとおかしくなったり、意味が微妙に変わってしまう場合も多い。タラ形との使い分けについては、次の節で少し詳しく見る。

さて、レバ形の言いさしが聞き手存在発話において勧めの意味を持つに至る筋道は、聞き手不在発話における願望の用法の由来と基本の部分では同じである。すなわち、「S<sub>1</sub>レバ」は、望ましい帰結S<sub>2</sub>をもたらし条件として話し手が導きだしたもので、それをさらに聞き手にもちかけているという点で願望の用法との違いが生じる。併せて、タラ形が勧めを表わす場合と同様、レバ形の勧めの場合も、S<sub>1</sub>の主語は聞き手であり、かつ、S<sub>1</sub>の述語は意志的動作でなければならないことは、言うまでもない。

「聞き手がやろうと思えばできる動作をするということ」(=S<sub>1</sub>)を、望ましい帰結(=S<sub>2</sub>)をもたらし条件として聞き手にもちかける」という発話行為は、「勧め」にほかならない。

願望の用法については、前節で、S<sub>2</sub>が文脈情報の中に具体的に突き止められるものからそうできないものまであることを指摘したが、全く平行的なことが勧めの用法についても言える。

まず、「どうすればS<sub>2</sub>が実現するか」という課題設定が文脈の中で明らかな例を見てみよう。

(26)みのり：私、好きだとかって示したりするのどうも苦手なのよね。

芳美：誰かにとられちゃうよ。世の中にはいい女、いっぱいいるんだから。

みのり：ね……。うちの妹だったら何だって思った通りやっちゃうと思うの。同じ姉妹なのにね……。

(中略)

芳美：ねえ、妹さんにやり方相談してみれ

ば。

(ひらり①)

(27) [電話で]

五代：あ、おれ五代。映画行かんか？ 券はあるんだ、指定席。アホ!! 誰がおごるか。ちゃんと金払えよ。

坂本：じゃーだめだ、おれ金欠だもん。彼女でも誘えば？

五代：彼女がいれば、おまえなんかに電話せんわつ。

坂本：はっはっは、そ〜〜だったね〜。

(めぞん②)

実現が望まれているコト(=S<sub>2</sub>)の内容は、(26)では、「好きだという気持ちの示し方がわかるコト」、(27)では、「券がはけるコト」であり、どちらも、文脈から解釈可能である。そのS<sub>2</sub>を実現させるべく、話し手は、「S<sub>1</sub>レバ」という条件をもちかけている。

一方、S<sub>2</sub>の内容が具体的には示されておらず、単にS<sub>1</sub>の実現を望ましいと思う気持ちを聞き手にもちかけている場合も多い。

(28)おじちゃん、久男が偉くなったらここんちのお酒、寒風山って名前に変えれば。

(=②)

(29)ひらり：ねえ、二人って何か似合う。デートすればア。

(=③)

このような場合においては、「ドウスレバS<sub>2</sub>カ？」と言えるような具体的なS<sub>2</sub>は、文脈の中には見当たらない。

## 4. タラ形とレバ形の使い分け

以上、見てきたように、タラ形の言いさし表現とレバ形の言いさし表現は、結果的には似たような意味を表わすことが多い。「願望」「勧め」という用法分類のための便宜的なレッテルを貼ってしまえば、意味の違いは捨象されてしまう。しかし、これまでの議論で示したとおり、「願望」にせよ「勧め」にせよ、そのような解釈に至る道筋には、両者の間で違いがあるのだから、それに伴ってニュアンスの違いが生じることは、たやすく想像できる。

この節では、前の二節での説明を補強する意味もこめて、タラ形とレバ形の使い分けの要点を概観してみたい。

なお、タラ形は危惧の意味で使えるが、レバ形で

は使えない、ということは、前の節ですでに指摘したので、ここでは繰り返さない。この節では、「願望」「勧め」という、両者に共通の用法に限って、比較する。

### 4.1. レバ形の方が適当な場合

レバ形が使える場面では、多くの場合、タラ形での言い換えも可能である(逆は真ならず)。少なくとも、タラ形を使うとおかしくなる場合というのは極めて少ない。しかし、レバ形の方が的確に話し手の心的態度を表わすことができるような場合というのが、確かに存在する。そのような場面を、願望の用法、勧めの用法に分けて見ていく。

#### 4.1.1. 願望の用法

願望の用法でレバ形の方がふさわしい場合として、次の2つの場合が挙げられる。

(あ) 反実仮想の場合

(30) これでこいつさえいなければ……

(めぞん)

(31) 緑風：診療所が開いてりゃなア。

梅若：早く何とかならんもんでしょうか。

(ひらり①)

(32) 三鷹：やだなあ、ひとこと声かけてくされば……

響子：でもなんか…熱中なすってたから、

悪くて……

(めぞん⑫)

現在の事実あるいは過去の事実と食い違うことを仮想して願望を表出する場合は、レバ形の方がふさわしい。

これは、現実と異なる条件であれば帰結が異なっていた、とする考えの道筋が、「-Pレバ-Q」という裏の意味を持つ「PレバQ」の本来的な性質と適合するためと思われる。「PタラQ」には、このような裏の意味はないので、願望と現実とのコントラストをこれほどはっきりとは表わせない。

(い) 相手の意志に配慮した願望の場合

(33) 義姉：しばらくは共働き？

響子：はい、それで…できたらもうしばらく

一刻館の管理人を続けさせていただけ

ればと思って…。

義姉：うちは大助かりよね、おとうさん。

義父：ああ、みんなも喜ぶだろう。

(めぞん⑮)

(34) お客さまには午後五時ごろ集まっていただ

くことになっているのですが、あなたには朝十一時頃から来ていただければと思っています。お家でもなにかとお忙しいと思いますが、私の頼み、是非是非聞き届けてください。よいお返事を待っています。

(手紙全書)

この場合も、Pを仮定する裏に-Pの含意のあるレバ形の性質が効いている。Pの成立が聞き手の意志に委ねられている場合は、話し手が一方的にPを仮定するよりも、-P(Pの不成立)の可能性も考えながら仮定したほうが相手の意志を尊重した丁寧な言い方になる。

#### 4.1.2. 勧めの用法

(あ) 聞き手の現状を変えさせようとする場合

(35) ひらり：ねえ、戻ってくれば。

明子：親方が心配してるってわかっただけでいい気分。つれ戻しに来るまで戻らないわ。

ひらり：親方だってプライドあるもん、つれ戻しになんか来ないよ。(ひらり②)

(36) ゆき子：久男、まだ寝てんのかしら。

ひらり：ほっとけば、あんなヤツ。

(=㉔)

(37) 一ノ瀬：あわれな少年にプレッシャーをかけて……。

響子：はあ？

一ノ瀬：デートくらいすんなり行かせてやればー？

響子：あら…ネクタイ直してあげたのがいけないんですか？ (めぞん⑤)

(38) ゆき子：へえ……プロポーズ。

みのり：ホントは竜太先生がいいけど……。

ひらり：(ツンと)なら大事にすればア？

みのり：大事にしすぎて縮こまっちゃうのよ、アンタになんかわかりっこないわ。

(ひらり③)

(39) みのり：(新聞を見ながら) 芳美、ロシアの話とEC統合の話とどっちがしゃれてる？

芳美：ンなことより、リンゴダイエットとか、身近な話題から入れば？

(ひらり③)

相手に「Pレバ？」と勧めることは、裏の意味として、「現在Pでない。だからQでない」を伴う。

「Pでない」とは、単に「Pをしていない」場合だけではなく、「Pではない動作P'をしている」場合の可能性も含む。すなわち、白紙の状態からPという動作をするよう勧める場合と、P'という動作をしている状態からPをする状態へと変わることを勧める場合とが考えられる。タラ形との違いが出てくるのは、後者の場合である。

(35)～(39)のすべての例において、「Pレバ」は、すべて、聞き手が望ましくない帰結-Qをもたらすような動作P'を現在行なっているような文脈で発せられたものである。たとえば、(35)は、「(聞き手が)戻らずにいる」状況、(36)は、「(聞き手が)久男に干渉しようとしている」状況、(37)は、「(聞き手が)第三者を行きづらくしている」状況、といった具合である。

「Pタラ」を使った場合、「P'ではなくてPにすれば帰結は変わってくる」という裏の意味は出ないから、このような文脈では、「Pレバ」が効果的である。もっと言えば、「どうしてP'するの？ Pすればいいのに」というニュアンスが「Pレバ」にはある。

(い) 聞き手の願望を見越して是認する場合

(40) ひらり：結構裏で勉強してんだア。

竜太：バカヤロ。ンな暇じゃねえよ。

ひらり：ウソ。もうわかった。結構力士たちのこと愛してんだ。

竜太：お前なア。怒るぞ。

ひらり：いいじゃない。隠すことないよ。

力士たちにそう言えば？ (ひらり①)

(41) ひらり：[オ姉チャンハ] せっかく好きな人とつきあったのに何だかんだ言っては不幸の芽をさがしてクヨクヨするのが好きなのよ。不幸食べて生きてりゃいいわサ。こんな女に私の大事な人任せておけないからね、とるわッ。

みのり：どうぞ。とれば。次がいるもん、私。(ひらり③)

(42) ひらり：どうするの、竜太先生。

みのり：関係ないわよ。別れたんだもん。

ひらり：一回ちゃんと話せば。

みのり：もうたくさん。ひらりつきあえば。

ひらり：いいの？

みのり：……どうぞ。(ひらり③)

(43) 完治：がまんすることないよ。

さとみ：!?

完治：もっと自分の幸福に貪欲になってもいいんじゃない？ ぶつかれよ、三上に思ってること全部ぶちまけて……。

さとみ：あ……ねえ、東京でも星は見えるのね、あれオリオン座だったっけ？

完治：ほら、またがまんする。もう、がまんするのはやめろよ。

さとみ：……。

完治：泣いちゃえば？ がまんしないで…  
泣いちゃえよ。 (東京②)

これらの例において、「Pレバ」は、聞き手自身がPという動作をしたがっているにもかかわらず、何らかの理由で聞き手はそれを実行に移さないでいる(と、少なくとも話し手には思える)、という文脈で発せられている。ここでも、「-PレバーQ」という裏の意味が効いている。話し手は、「-PではなくてPすればよいのに」と暗に言っているわけである。

#### 4.2. タラ形の方が適当な場合

4.1. では、「-PレバーQ」という裏の意味の存在がプラスに作用した結果「Pレバ」が「Pタラ」よりもふさわしくなるような場面を考えた。この節では、逆に、この裏の意味があるがゆえに「Pレバ」が使いにくくなるような場面を考えることになる。

前節にならって、願望の用法、勧めの用法のそれぞれについて、見ていくことにする。

##### 4.2.1. 願望の用法

願望の用法では、収集したすべての用例において「Pレバ」の方が適切か、あるいは、同程度に適切であった。したがって、「Pタラ」の方が適切であるような例は見当らなかった。

これは、願望という心理作用が、実現していない出来事の実現を望むという営みであり、これは、まさに、先程から述べている「Pレバ」の裏の意味と符合するからだと思われる。

##### 4.2.2. 勧めの用法

勧めの場面のうち、前節で述べた特殊なものを除けば、「Pタラ」の方を使うことがふつうのようである。もっと言えば、勧めの用法の多くの場合について、レバ形を使うと、間違いとまでは行かないまでも、不要なニュアンスが出てきてしまうことが認められる。

(44) 慎平：それから……二週間くらいして、どこで聞いたのかわからないけど、突然、おれのマンションに来たんだ。

誠：マンションへ!?

慎平：せっかく来たものを、帰れとも言えないだろ？

誠：それで、どうしたんだ？

慎平：だから……ま……上がったらって言ったんだ……。(男たち)

(45) [荻沢家・夫婦の部屋(夜)]

着がえたりしている洋一、ゆき子。  
お互いに根本のことを気にしているがごくさり気なくふるまって。

ゆき子：シャワー使ったら？

洋一：ああ。……しかし変わらん、みんな。(ひらり①)

(46) みのり：そんなことないって。ま、ま、お茶でも飲め飲め。

ゆき子：冷蔵庫にゼリーあるから出したら。

ひらり：お母さんってすごいねえ。こんな時でもゼリーって言うもんねえ。

(ひらり②)

上の3例は、すべて、白紙の状態に聞き手にPという動作を行なうよう勧める場面である。「白紙の状態」とは、聞き手がPではない動作P'を行っていたり、Pを(本当はやりたいのに)やらずにいたり、といった、Pと対立する-Pがあらかじめ存在しない状態をいう。

このような白紙の状態では、タラ形で勧めるのがふつうであり、レバ形を使うと、特別な(多くの場合、不必要な)ニュアンスが生じる。

たとえば、(44)で「上がったら」と言ったとすると、

(47) 遠慮せずに上がればいいのに。

あるいは、

(48) 上がりたければ、上がればよい。

といった、余計なニュアンスを伴ってしまう(このニュアンスの生じる理由は、前節で述べた)。

## 5. おわりに

この論文では、タラ形・レバ形による言いさしの用法を、接続用法(「完全文」の用法)と関連づけて記述した。その過程で、統語的に不完全な文がどうして発話レベルではまったく完全な文として解釈されるのか、また、言いさし表現にすることによ

て、条件用法とは一見関係がないように見える願望・勧めという用法がなぜ生まれるのか、ということの説明を試みた。

まとめの意味で、節ごとの要点を抜き書き的に繰り返しておく。

### ①「S<sub>1</sub>タラ」による言いさし

- ・聞き手不在発話では、「願望」「危惧」を、聞き手存在発話では、「勧め」を表わす。
- ・欠けているタラ節の帰結が問題になっているのではない。話し手は、タラ節の内容を想定しているだけであり、結果的に、タラ節の内容の実現それ自体に対しての話し手の評価的感情—良い・悪い—を表出している。
- ・「勧め」の用法は、「願望」の用法(=表出)が聞き手にもちかけられて、働きかけに移行したものである。

### ②「S<sub>2</sub>レバ」による言いさし

- ・聞き手不在発話では、「願望」を、聞き手存在発話では、「勧め」を表わす。
- ・「S<sub>1</sub>レバ」は、望ましい帰結S<sub>2</sub>をもたらす条件として話し手が導きだしたものである。
- ・S<sub>2</sub>は、文脈情報を手がかりに具体的な命題の形で復元できる場合もあれば、何か「望ましいコト」の存在が抽象的に暗示されるのみの場合もある。
- ・「聞き手がやろうと思えばできる動作をすること(=S<sub>1</sub>)を望ましい帰結(=S<sub>2</sub>)をもたらす条件としてもちかける」と、「勧め」になる。

### ③タラ形とレバ形の使い分け

- ・レバ形の方が適当な場合  
(あ)反実仮定の願望  
(い)相手の意志に配慮した願望  
(う)聞き手の現状を変えようとする勧め  
(え)聞き手の願望を見越して是認する勧め
- ・タラ形の方が適当な場合  
(お)白紙の状態で聞き手に動作を行なうよう勧める場合

## 註

- 1) たとえば、つとに国立国語研究所(1960:120)が「すすめの表現」として記述しているのを始めとして、Alfonso(1980:120)に「願望(desire)」、

森田(1989:687)に「促す言い方」、高橋(1993)に「願望」「すすめ」の用法の記述がある。

- 2) 例外的に高橋(1993)は、省略によってできた形式とはしつつも、これらの形式は、もとの形式とは違った述べかけ方を持つことを主張している。
- 3) 聞き手存在発話・聞き手不在発話という区別は仁田(1991)の考え方に拠る。
- 4) 同じく「願望」といっても、(5)(6)は、未実現のことについての願望、(7)は、すでに実現したことについての反実仮想的な願望であるが、ここでは、その区別は問題にしない。
- 5) McGloin(1976-7)は、「完全文」におけるタラ形・レバ形の使い分けの説明として、条件節の内容についての話者の心的態度が、タラ形は否定的で、レバ形は肯定的であるという主張しているが、この説が妥当でないということは、タラ形の言いさしが願望を表わすという事実が端的に示している。
- 6) 原則2の(α)のような含意が生じるのは、誘導推論による。詳しくは、坂原(1985:100-116)を参照のこと。

## 用例出典

- <シナリオ>「男たち」=鎌田敏夫『男たちによるしく』／「想い出」=山田太一『想い出づくり』／「ひらり」=内館牧子『ひらり』
- <コミックス>「めぞん」=高橋留美子『めぞん一刻』／「東京」=柴田ふみ『東京ラブストーリー』
- <その他>「手紙」=手紙研究サークル『四季おりおりの手紙全書』

## 参考文献

- 国立国語研究所(1960)『話しことばの文型(1)―対話資料による研究』秀英出版。
- 坂原茂(1985)『日常言語の推論』東京大学出版会。
- 高橋太郎(1993)「省略によってできた述語形式」『日本語学』第12巻第10号。
- 鶴田庸子(1984)「日本語教育のためのタラとバの分析」『日本語教育論集―日本語教育長期専門研修昭和58年度報告』国立国語研究所。
- 仁田義雄(1991)『日本語のモグリティと人称』ひつじ書房。

森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店。

Alfonso, Anthony (1980) *Japanese Language Patterns Vol.2*. Sophia University.

McGloin, Naomi Hanaoka (1976-77) “ The Speaker’s Attitude and the Conditionals *to*, *tara*, and *ba*”, *Papers in Japanese Linguistics* Vol.5.